週刊東洋経済　2019.4.27-5.4 号に掲載

AIの父による古典と情報革命の予言の書

スクウェイブ社長　黒須 豊

AIの父といわれる元MIT（マサチューセッツ工科大学）教授、ミンスキーの名著が『心の社会』。AIに関わる人にとっての必読書だが、とてつもなく難解である。書いてあることが難しいというよりも、今まで想定したこともない視点に慣れるのに苦労するのだ。

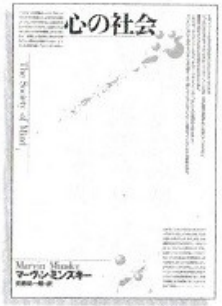
評者が本書を知ったのは、社会人になりたての頃だったが、じっくり読むことになったのは、それから約10年後にMITの大学院でミンスキーの授業を受けたときだ。すでにAIについて少なからず実践を積んでいた評者にとっても、本書は難解で、授業についていくのに必死であった。

適当に理解したつもりになるだけなら、ページの進みは速いだろう。しかし、深く理解しようと思うと、様相は一変して、実は自分が何も理解していないことに気づくのである。もがきながらも、何とか理解が進むと、天才ミンスキーの心の窓をのぞいた気分になる。

現在、官民双方の組織でAIに関するアドバイザーを務める評者であるが、いま一度初心に戻って本書を読み返してみたい。おそらく、読むたびごとに、新鮮な視点にうならされることになると思う。

＼読み返したい！／

心の社会



マーヴィン・ミンスキー 著
安西祐一郎 訳
産業図書／1990年
4300円＋税

『第三の波』は、今も進行する情報革命を1970年代に未来学者トフラーが見通した内容をまとめた、いわば予言書である。

むろん、単なる絵空事を記述したわけではなく、農業革命、産業革命の歴史と当時の進捗を分析したうえで、情報革命が進展する未来について見事な洞察を示したものである。本書の予言がどの程度当たっているのかという興味本位で読んでも構わない。絶版になっているが、未読の方には、一読を強くお勧めする。

現在、情報革命が進展している事実を否定する者は誰もいない。では、情報革命の結果、どのような変化が世の中に生じたのか、そして、今後は何が起きるのか。

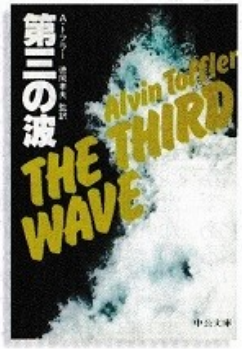
例えば主要な予言の1つとして、生産と消費が同時に行われるプロシューマーの登場を挙げることができる。これが現実化したいちばんわかりやすい例はユーチューバーだろう。また、情報革命は在宅勤務を促進することなどを予見していて、その見通しの的確さには驚かされる。

しかし、トフラーの予言には細かいところで、少なくとも現在とは違っている部分も存在する。

それらが、本当に外れだったのか、これから来る未来なのか、そんな視点で本書を読んでみると、将来に向けたヒントを得ることができるだろう。本書は、評者の生涯で不動の推薦書ナンバーワンである。

おすすめ

第三の波



アルビン・トフラー 著
徳岡孝夫 監訳
中公文庫／1982年
絶版